
アルメフィラ

綴音かをり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルメフィラ

【Nコード】

N8385X

【作者名】

綴音かをり

【あらすじ】

「絶対、大丈夫」

記憶を無くしてしまった巫女の少女ユウイと、彼女を守るために闘う少年シテイルが繰り出す、詠唱するハートフルファンタジー。天然発言満載の主人公ユウイを、毒舌腹黒少年シテイルが制したり、ハプニングが大いにあったりなかったり。彼女達を囲む仲間達も、とても愉快で温かい話。心温まるコメディから、ギャグ。また時に残酷で悲しいシリアス場面やグロテスクな場面アリ。

何が大切か、何のために生きているのか……
作者が思う心中を詰め込んだ作品です。

《第一章》プロローグ 凍えた時計が廻り出す

季節は夏。

燦々と照り付ける陽射しが大地に照り付ける。強く降り注ぐ陽光。じりじりと大地を焼く陽光を緩和してくれているのは、膨大なこの地に生える、大量の植物達だった。

見渡す限りの緑。その大陸には中央部にのみぽっかりと穴が開いているかのように都市が並び、その都市を囲うように三つ。都市の中央に天を貫くように一つ。規則正しく塔が、優雅に聳^{そび}えていた。

ピュルルル——

何処からともなく聞こえてくる鳥の鳴き声が心地良い。

その大陸の外側に位置する、鬱蒼^{うっそう}と繁る膨大な森のとある場所に。

何故か、沢山の動物達が集まっていた。

その姿を見て、小首を傾げながら近付く小さな影。その人影に驚き、動物達は一斉に森の中へと姿を消した。

「……………女、の子？」

まだあどけない、若葉のようにみずみずしい、少年の声が木霊こだまする。

年齢は5、6歳程であろう。艶やかな漆黒の髪に、真っ直ぐした濃い紫苑色をした瞳を丸々させ、そこにある”何か”を凝視していた。

動物達に囲まれていた中心にいたのは、まだ5、6歳程の自分と同年代程の少女だった。だが少女の体はあちこちに泥が付着し、真っ白い服にもこびりつくように赤黒いものが滲んでいる。

そして少女が身に着けている服は、全く体に合っていないものだった。強いて言うならば、15、6歳くらいの女児が着る大きさの服であり、身に着けているとは何がどうであれ言えない。

どちらかと言えば、”服に着せられている”と言った方が良かった。

ろう。

細く、染み一つ無い雪のように白い腕には微かに切り傷があり、髪にも泥や砂埃が付着して、元の色さえ分らないほどくすんでいた。

「……………大丈夫？」

そんな中、森に果物や木の実を取りに来た一人の少年が、恐る恐ると少女に近寄る。

微動一つしない少女。

少年は少女が微動しないことに気付き、急いで少女に駆け寄った。

両親から教わったように軽く口に小さな手を近付け、呼吸を確かめる。

少女は薄らとだが、小さな呼吸を繰り返していた。弱々しい、酷

く衰弱した表情。顔も青白い。

しかし頬に朱が差し、頬が上気していた。触れた肌は氷のように冷たいのに。

少年は急いで少女の額に自らの額を当て、熱を確かめる。これも、自身の母親がやってくれたことを思い出しやったことだ。

——熱い。

かなり熱が高い。そう判断した少年は、少女を少女が被っていた衣服で包み、持ってきて来ていた籠を放ったらかしにして抱き抱えた。

思っていたより、酷く軽い重量に少年は目を見張る。

体の線が酷く細いし、何日間も食事を取っていないのかもしれないな

い。

まだ幼い知識でそう判断した少年は、少女を落とさないようにしっかりと抱き締め、自身の家へと一目散に走った。

途中で突き出た大きな根に足を取られ転びそうになったが、流石に少女を抱えたままではこけられない。

なんとか体勢を保ちながら、風のような速さで走り続けた。



「母さんっ……!!」

バンツツッ……!!

両腕が塞がっており、それでいて酷く混乱していたために、少年は走っていた時の勢いのまま蹴破る形けやぶで家の扉を開けた。

”母さん”と少年に言われたのは、まだ若々しい、長身の女性だった。艶やかな漆黒の髪を背中辺りまで伸ばし、少々癖の付いているウェービーの髪質。

丸みを帯びた、琥珀色の澄んだ瞳をぱちぱちとさせ、こてんと首を傾げながら口を開く。

「あらあら。扉は蹴っちゃいけないでしょう？ 全く、そんなことしてるとお父さんに怒られ——」

「そんなことどうでも良いから、この子、助けて!!」

あらお母さん、どうでも良いって言われちゃった…………——よよよと泣き崩れる真似をした後、自身の息子が抱えている小さな生き物を凝視。

「…………シー君の彼女？」

「そんな訳無いでしょっ!!? この子は森で倒れていて、しかも顔色が悪いから放っておけなくて。……とゆうより、そんな名前でいつから呼び始めたっけええ!?!」

こんな時でも突っ込んでくる息子に目を細め、女神のような微笑みを浮かべる女性。

「ふふふっ、今からよ。やっぱりシー君はからかいがあるわあ。
——まあ、それは後にして」

静かに片膝を付き、息子が抱える少女の顔色を伺う。

「…………シー君。今直ぐお湯沸かしてきて。それと清潔な布も。布は兎に角沢山ね。私はこの子を私のベッドまで連れてくから」

「わ、分かった!!」

少女を母親に渡し、バタバタと激しい音を立てながら台所へと走って行く息子を見送り――

カツカツツ。ピンヒールの靴音を響かせ、足早に自分の部屋へ向かう女性。

歩く度に女性の美しい髪と、ワンピースの裾が風に揺れる。

バンッ！！！！息子と同じように、足で扉を開け放つ女性。どっちもどっちだ。

「あら、やだ。私もシー君のこと言えないわねえ。まあ良いかしら。何せ緊急事態なもの」

そう一人ごちると、白を基調としたあっさりした部屋を突き進み、天蓋付きのベッドまで進む。

パリッとしたベッドのシートの上に少女を寝かせると、汚れている巻き付いていた衣服を少女の身体に障らないよう、丁寧に取る。

「あらら。この服あちこち切れてるし、泥まみれ。後で洗わないと――」

ぴたり。刹那^{せつな}、女性の動きが止まった。

「……………この服の質といい、デザインといい――」

ちらりと、ベッドに横たわっている少女の姿を見た。苦しそうに薄い呼吸を繰り返す少女。

年齢は5、6歳くらいであろう。しかしその容姿は少女とは思えないぐらい整っており、歳を重ねたらさぞ綺麗になる顔立ち。

細長く雪のような肌をした手足は華奢で、触れたら壊れてしまいそうな程細い。

それでいながら、幼女の宝石めいた輝きは、くすむ事無く浮き彫りになっていた。

髪も、泥や砂埃でくすんではいるが、間違いない。否、間違える筈が無い。

「貴女……………」

自身の震える手に心の中で叱咤し、ゆっくりと少女の頬に添える。

冷たい頬。明らかに体調は万全ではない。

「母さんっ、持ってきた…………っ」

はあはあと軽く息を切らして、少年が小さい体で真っ白い布と大きく深めの陶器の皿の中に、湯気の立つお湯を危うい感じで持っている。

瞬間的に女性がパツと添えていた手を放す。幸い、息子には何もばれなかったようだ。

「あら、ありがとう、シー君。さて、シー君の次のお仕事は薬草畑に行つて、タフィスの花とティーティの葉っぱを採つてきて頂戴。あ、因みにタフィスは花だけよ。それと、丁寧に抜かないと鳴き出すから、優しく優しく愛撫しながら採つてね。あ、因みにティーティは根っこごと抜かないと、怒って触手みたいな出すわよ。因みにその触手、猛毒だから気をつけて」

「なんでそんなに楽しそうなんですか！？とゆうよりそんな危険物畑に易々と植えないで……！！」

まさかのどちらも危ない発言。彼女には息子を労る気持ちなど、毛頭無いらしい。

肩を怒らせる息子とは対照的に、女性は薄らと優しげに微笑み――

「後、ヘレナの花を採ってきて。これは薬草用じゃなくて、普通の庭に咲いているの。お母さんの部屋に飾りたいから」

そう言う彼女の表情は、まるで女神のように優しく、温かいものだった。

待ち侘びていた者を、祝福するように。

ヘレナの花言葉は――

《貴女に祝福を》

?

「……………ん？」

ぴたりと、湖で水浴びをしながら、樹海を眺めて楽しんでいた少女”がふと動きを止める。

その様子を呆れ顔で見つめていた長身の女性は、その少女の変化に目を細めた。

上を見つめたまま、微動だにしない少女。
新緑を思わせる瞳は薄らと翡翠の光をまとい、瞬きは皆無、呼吸さえ限り無く薄く少ない。

ゆらゆらと揺れる水面に漂う少女。その少女が、瞼を落とした。

「何をしていたのですか？」

濃淡の薄い声色で問い掛ける女性。その声質はあくまで機械的で単調だった。

そう。まるで、人形のように。

しかし少女は、その声質になんら気にした風も無く、少女はふんわりと、花が綻ぶかのような笑みを浮かべた。

「多分、いや、絶対に、聞いたら驚くよ？とゆうより、信じられないかも」

「……………何がおっしゃりたいのでしょうか」

先ほどとは打って変わって不思議そうに、それでいて不愉快そうに眉を顰^{ひそ}めた女性。

そこに彼女の人間らしさを垣間見たのか、くすくすと悪戯っぽく笑う少女。

しかしぎろりと女性に睨まれ、軽く肩を竦めてみせた。——勿論、口元は弧を描いたままであったが。

その態度に女性は僅かに顔を歪めたが、深呼吸の変わりに嘆息を零し、頭を振る。彼女のペースに嵌まったら終わりだという事を良く知っているからだ。

一度綺麗に頭をリセットし、彼女は冷静なった頭で少女と向かい合う。

「——それで？如何致したのでしょうか」

その切替えの早さに心底残念そうに顔を陰らせる少女。しかし再度思い付いたように笑顔を見せると、両手で水を掬う少女。

そして楽しそうに、掬った水を宙へと投げた。

パチャッ。

きらきらと光に反射しながら、宙を舞う水。

『コリナ・フレーネ』

刹那、微かに聞こえる呟きにも似た呪文。
その瞬間まるで時が止まったかのように、宙に大小様々の球体の水が浮いていた。

その球体を少女がつんつんつく度に、ポチャツとかたちを変えたり、分解したりする水玉。

しかしその行動は、女性の怒りのボルテージに易々と触れていた。

「一体何がした——」

「昔、良く、こんなの作って遊んでたよね」

懐かしむかのように、薄らと目を細める少女。その表情は楽しそうであり、しかし愁い^{うれ}を帯びたかのように、寂しげな微笑みをしていた。

風^{ふう}蕾^{らい}系と呼ばれる、自然の万物の力の関係を宿すものの想像魔法。自然のエネルギーを利用して想像するため、使用している対象者への負担が少ないのが利点だ。昔はよくこうやって遊んだものと、少女は優しく笑いながら思った。

「——よっと」

その一言に黙りこくる女性。しかしそんなことなど眼中にない様子で、少女は湖から出た。

バランスの取れた、美しい裸体が晒される。しかしそんなことなど気にもとめずに、少女は親指と人差し指で指を鳴らした。

パタパタパタッ。刹那、宙に浮いていた水玉が一気に湖に落ちる。

ブワッ。一陣の風が駆けつけたとき、少女は衣服を身にまとっていた。

緑と黄色を基調とした、ワンピース調の法衣。ふわふわとスカートの裾が風に揺れ、女性の美しい長髪が靡いた。

「……………我らの華君が、皇臨した」

そのたった一言で酷く動揺し、肩を大きく揺らす女性。
震えそうになる身体を必死で押さえ付け、唇を噛み締めた。

心臓が五月蠅いくらいに鳴っている。ドクドクと高まる鼓動が痛い。

しかしその知らせは、今まで彼女が待ち望んでいた一言で。

もう諦めかけていた、願いでもあった。

「……………本当、ですよね」

「うん、間違いない。さっき四位から聞いたことだから」

すると、今まで緩めていた顔を陰らせ、少女が悲しそうに呟いた。

「」

「……………え？」

ザワツ。辺りがざわめく。

樹々が幹や枝を揺らし、鳥達が異常を報せるかのように羽ばたき、
水面が波紋を生み、地が揺らぐ。

晴れ渡る空が澱んだ灰色に生め尽くされた。降り注ぐ雨。それは
まるで、突き刺さるように痛い豪雨。

しかし、これはただの兆^{きざし}し。

世界が、動き出す音が聞こえた。



離境大陸ミステイラ。^{りきよう}

繋がる大陸は一つも存在せず、正しく離島と呼ぶのに相応しいものの筈なのだが、その面積は大陸といえるほどの巨大さ。故に此处は”離境”と呼ばれ、世界三大大陸に任命されている大都市である。

人口約五千万人が暮らすこの大陸は、神の慈愛なる魔法が世界一発展している場所であり、またその魔力文化を取り入れた機械文化や道具などがとても盛んな大陸でもある。

総面積の約七割近くが樹木なる植物で埋め尽くされた大陸。

そのため、他所では咲くことのない花や植物、動物などの生き物が多く、人の介入を嫌う精霊や妖精などの清きモノ達の集まりドロ口のような場所でもある。

そんな大陸の中央部に、ぽっかりと穴が開いているかのよう広がる都市。その都市の中央には天を貫くように白銀の塔が聳え、その白銀の塔の三分の二ほどの高さをもつ金色の塔が三つ、白銀の塔を囲うように規則正しく並んでいた。

この塔はそれぞれ、世界の政治や経済、法などを統べる塔。そして中央の塔には《皇如》こうじょ率いる塔員が、世界の境界を守るために働く。言わば、世界のために設立された、世界の象徴である。

歪曲に潜む魔族や魔物。アンデッド クラッチス人体に影響を及ぼすこれらのモノを倒したりする戦闘のために特設された精鋭集団や、魔法が浸透しているこの世界でも厄介な《調律》や、魔法構築など、世界の秩序を守る魔術師達を育て、世界を守る。それが此処での”仕事”であり、役割だ。

——ある意味、違うことのために成り立っている場所でもあるのだが。

そして、白銀の塔の名前を《千年奏樹》リアフエリル。詠うたと魔法が結合した、世界唯一の場所。

千年奏樹リアフエリル地上、特殊波長区域〈神榮の森〉しんようにて。

様々な魔法訓練で浸透した多種多様の魔力波長が組み合わさり、特殊な護りや洗礼を生み出す、ある者達だけが使うことが許される聖域。

その理由は、巨大すぎる魔力は、他者の人体への成長バランスや波長などに多大なる影響を及ぼすことが知られていたため、一定の魔力を持たない者は入れない制度システムになっているためだ。

四つに区分された内の一つが〈神榮の森〉

その他の区域は食用の樹木や植物が植えられていたり、観賞用や研究用の花が咲いている温室。後は野外用に造られた戦闘領域バトルフィールドで成り立っている。

季節は初夏。カラカラとした温かい空気が肌を撫でる中、温度が幾分か低い森の中で、慎重に足を進める少女。

まだ明けきれてない空は紺碧や橙色、黄色と綺麗なグラデーションを宿し、そんな空の中歩く森は酷く暗く足場が悪い。

しかも僅かに朝霧が立ち込める森は、足場が悪い上に視界さえ定まらない。迷いの森のようなものだ。

しかし少女の素足は、迷いなく森を突き進んでゆく。

そして行き着いた先に見えたのは——エメラルドグリーンに輝く湖だった。

刹那、ふわりと揺れる”何か”。

森に漂うかのように揺れるモノは、普通の人には目視することも叶わない聖なるモノであった。

そして開けた場所に着いたとき、少女の髪が柔らかく靡いた。

「あ、おはよう。風霊さん」

ふんわり。まるで花が綻ぶかのような微笑みを浮かべ、少女が自身の背後を見つめた。

『おはようございますわ。我らの麗しの君。美しき洗命せんめいの姫君』

ぼんやりと透けていながらも、確かにその場にいる金髪に翡翠色を灯す若葉色の瞳をした女性は、少女の白銀に薄らと金粉を振り撒いたかのような髪を一房持ちながら、優雅に会釈してみせた。

その拍子に光に晒された少女の長髪。それはまるで色を写す鏡のように虹色を宿し、きらきらと輝いて見えた。

『ズルイですわっ！わたくしも姫様の髪を触りたいです！』

『わたしも同じだ。さあ変われ風霊』

『いえ、わたしにお変わりください』

『嫌ですわ』

きゃわきゃわ騒ぎ続ける緋色や水色、褐色をそれぞれ宿す精霊達に、なんの躊躇いもなく突慥貪つっけんどんと言い放つ風霊。

その瞬間、きゃわきゃわと騒いでいた精霊達が、ギャアギャアと騒々しい声で反論し始めた。

その喧嘩の元凶である筈の人物なのに、思いつきり話し合いから外されている少女。

自分の事なのに、と内心嘆きつつ、少女は必死に精霊達を宥め続ける。

しかし口論は更にヒートアップし、もう少女一人では対処しきれないような魔法を使つての戦闘バトルが始まるかと言う時、がさりと木が軋む音がした。

「ふふふっ。相変わらず人気だね、ユウイ。羨ましいなあ」

「ファティっ!？」

突如としてその場に現れたのは、美しい翡翠色の髪と瞳を持った、見目麗しい少女だった。

ニコニコと、全く止める気のない笑みを浮かばせ、頬杖を付きながら左右に首を揺らす少女。その度に、肩にかからない程度の長さの髪がゆらゆらと揺れる。

そのいかにも手伝うという気力のない仕草をされ、がつくりと項垂れる白銀に金粉を振り撒いたかのような髪に、サファイヤのような深く濃い瑠璃色の瞳を持つ少女。

優雅な長髪がさらりと流れ、虹色を灯すその様は、誰もが溜息を零すほど、見目麗しい姿だった。

その少女をユウイ。フルネーム、ユーイリシア・リル・フェルフ
イウォーレ。この塔の第二位聖域に住む、《巫女》と呼ばれ敬われ
る世界有数の魔法使いである。

そして翡翠色の少女をファティ。フルネーム、ファノステイナ・
ティティール・クレファリータ。彼女もユウイと同じく第二位聖域
に住む《巫女》であり、風薔系の魔法を得意とするものである。

「……………はあ。どうして四大元素を司る精霊同士の言い争いなんだ
ろ……………」

精霊には階級が存在する。まず一番上に四大元素、火水土風を宿
す精霊が上位に組み込み、そのモノ達の配下に花や木などの精霊が組
み込まれる。光や闇の精霊は言わば別格とされ、いる精霊も少ない
とされるのが現状だ。

——まあ魔力波長の属性で言えば、全ての生命に必要不可欠な
水や風が、上位に組み込まれているのであるが。

未だ終わる気配のない精霊の喧嘩に軽く目眩を覚え、こめかみを揉みほぐすユウイ。

?

何はともあれ、精霊同士で魔法を行使する前に、このよく分からない騒動を止めさせることは必須。

ただでさえこの森は^{アルファじゅんけつしゅ}α純潔種と呼ばれる女性達が使用し、多種多様の魔力が宿っている言わば膨張器的な役割をしている場所でもあるのだ。そんな場所で修行などの魔力の開花や調整でなく攻撃系の魔法を使われてしまえば、何が起るかなんて想像したくない。森の大半が大破するのは必然であろう。

それだけは避けなくてはっ……！

しかもその争いの元凶たる人が世界の象徴なる巫女だなんて笑えない話だ。格好がつかない。

世界的にも敬われ護られ、讃えられている存在——それがα純潔種と呼ばれる女性のみの種族だ。

α純潔種は血の繋がりで生まれるわけではない。α純潔種の特
な点は、その身に宿す膨大な魔力の潜在量と、血液にまで溶け込
まれている魔力——言わば自身で魔力を随時形成出来てしまう体質。
そしてその並外れた記憶力と、生まれた時から神から授かった謳
われる、彼女達しか使えない特殊言語の存在だった。

α純潔種の出生は、神の加護を受け持つと言われている大陸ミ
スティーラだけだと言われている。そのため、ミスティーラでは生
まれたばかりの女兒の赤子を魔力検査にかけて、α純潔種であるかど
うかを審査するのである。

そしてもしもα純潔種の素質があるとされた場合、5歳から11
歳までの間に千年奏樹リフエリルに入り、生きる術を学ぶ。

本格的に塔員として働くことになったのなら、幼い少女達は《秘ひ
神子めみこ》と呼ばれる巫女の見習いになり、更なる魔法を修得する。

「せ、精霊さん達っ！私の髪なら幾らでも触ってもらって構わない
から、魔法だけはやめよっ!？」

抗争が未だ冷めぬ中、ユウイがあわあわとした様子で精霊達を見つめる。

その光景を、高みの見物というように空間系の固定魔法と浮遊魔法を使いながら見つめるファティ。

そんな彼女の表情は、いつになく楽しげだ。

くすくすと、くるくる回りながらほくそ笑むファティに、涙目になりながらユウイが睨む。

「ファティも手伝ってよっ！この森で攻撃魔法なんか使ったら、起爆するみたいに被害範囲が拡大しちゃうよっ！！」

「えーだって僕、そういう面倒事好きじゃないし」

ふわあ。眠そうに欠伸をし、悪戯っぽく笑うファティ。

彼女が眠そうにしているのは当たり前だろう。いつも気まぐれで朝にこの上なく弱いファティが、こんな早い時間に起きるなんて滅多にない。

しかしそんな状況にも拘らず^{かかわ}楽しそうに笑う姿は、普段の悪戯や催し物^{イベント}好きのファティとなんら変わらない笑みだった。

もぉ~~~~っ……！！！他人事だと思ってっ……！！

しかしそんなことを思ったところで抗争が終わる筈もなく、ユウイは涙で潤んだ瞳をして叫んだ。

「もう止めてくださいっ！！！」

刹那、ピキリと止まる抗争。

ユウイの潤んだ瞳。上目遣い。天使と呼ぶに相応しい見目麗しい容貌。

胸元でぎゅっと握り締める拳は更に彼女の可愛らしさを強調し、ユウイが着ている片方の肩が露出しているアシンメトリーなデザインに洗命^{せんめい}の巫女の紋章が刻まれた開いた袖口。後ろにいくにつれて裾が長くなっていくスカート。

全体を純白と蒼でまとめあげられた法衣の装いは、正しく”天使
で――”

ズキュンッ。ユウイのその姿に、精霊達が内心大いに悶えた。

そんなことになっているとは露知らず、とどめの一撃を食らわす
ユウイ。

「……………お願い」

こてんっ。首を傾げて願うその様は、精霊達を鎮静化に向かわせ
るには充分過ぎる打撃となった。

「……………うわっ……………撃沈？」

高みの見物をしていたファティが表情を引きつらせる。しかも、ユウイ自身はそんなことを狙ってやっているわけではなく、無意識にやっているわけなのだ。末恐ろしい。

「ユウイってさ……最終兵器並にスゴイよね」

鎮静化に向かった抗争を俯せになりながら頬杖ついて見つめ、ファティは一人呟いてみた。

その様子に、ユウイはこてんと再度首を傾げたのである――

「ところで、ファティ。私に何か用だった？」

地に丁度降り立ったファティを見つめ、ユウイが小さく問い掛ける。

「うん、そんなところ。えーっとね、遠征のお知らせでーすっ」

「……ファティふざけ過ぎ。ってことは、魔物クラーチスとか魔族アンデッドの討伐？ それとも調査とか？」

「第一皇如シリア直々の任務。指名は第二透位しゅういユウイと、第四透位リディア。同行に二組、秘神子を入れる五名で形成された部隊を選抜。向かうのは三日後の午前九時。場所は三大大陸の一つヘルラーシーレフ」

すらすらと、澁みなく紡がれる機械的な単語の羅列に思わず息を飲む。

第一皇如、シリア。

塔内を統べる女性であり、また塔の最上階《らくめい楽夢の園》に設置された世界最大にして最古の魔法具《アカシック・レコード彩織顕還律》の適合者でもある。

「遠征……急ぎみたいだね」

三日。それは所謂、今日に募集をかけて明日選抜部隊二組を決める。そして顔合わせをするくらいの時間だ。急ぎ以外に何があるのだろうか。

「うん。しかも巫女は、フェリース言語や他国の言語や歴史への理解力と知識、社交性で選んだみたいだからね」

フェリース言語。それは魔法を使用する際に、最も基礎となる特殊な言語の一つである。

「しかも第三と第七は別の場所に遠征。僕は言葉遣いとか社交性から無理だし、第五はまず外に行くつてので無理な対人恐怖症」

「第六と第八は適性無し、か……」

皇如の席は五つ。これはもう、既に埋まっている席だ。そして巫女に与えられた席は八つ。これは、八つに分けられた波長の色の内、高位な属性の波長を一番有し、得意とするものから第一として並べたものだ。

第一に翠^{みどり}。第二に蒼。第三に夜色。第四に金色^{こんじき}。第五に緋。第六に藍。第七に白。第八に無色。

闇^{アンデッド}は魔族の象徴となる色なため、精霊などはともかく魔力の波長としては”夜”や別名”陰”と表される。

そして”無”。これは時や空間など、何にも属さない透明な色。未知なる力。そのため使える者が少なく、しかも未知数な波長のため、最終位にいるのが現状だ。

「適性ねえー……確かに、巫女として必要な透力しゅりよくが適性値に達してなきや、無理だからねえ……。ま、そういう事だから、この三日は修行無しで身体を休ませたほうが良いと思うな」

にへらっ。緩い笑みを浮かべて、ファティが身体を回した。それとともに、ふわりと風に揺れながらひるがえ翻るスカート。

「うん。しっかり休むつもり。……だって無茶すると、シテイルが怒るんだもん」

ムスッと、不服そうながらも仕方ないというように頷くユウイ。何せユウイが無茶をしでかすのは、日常茶飯だからだ。

「アハハッ！！シテイルって怒るとこの上なく怖いもんねーえ。誰に似たんだか」

「……………多分、無茶すると怒るところはお父さん似で、黒いところ

はお母さん似だと思っ………」

ぽつりと呟いたユウイの言葉は、残念ながらファティには聞こえなかったらしい。

「ん？何か言った？」

「いや、なんでもない。なんでもないからね……っ」

「？」

少々、いや、かなり挙動不審ぎみな状態で首を横にぶんぶん振るユウイ。

なんのことだろうと気になりつつも、再度話してはくれなさそうだったので、まいったかといつも通りのマイペースでスルーし、次に悪戯っぽく口角を吊り上げる。

………なんか嫌な予感。

「わ、私、休まなきゃだから部屋に——」

「やっぱりさ、自分と一緒に同行する部隊くらい、自分で決めたくない？」

ガシッ。逃げる前に両肩を掴まれ、去るにもされない状態に陥おちいつたユウイ。

ファティが先のような笑みを浮かべているときは、ろくなことがないのが関の山だった。つまりそれは、誰かしらが必ず、彼女の悪戯に巻き込まれるということ——

しかも、ユウイが巫女に昇格してから、一番巻き込まれる率が高くなった悲劇。

「ち、ちよつとファティ……………っ！」

嫌な予感的中してしまった。全身がまるで氷になってしまったかのように、時間がたつにつれて冷えていくような感覚に見舞われる。

「さてさてっ。今回はどんな物語シナリオにしようかなあゝ」

「だから私は参加しない……………ってファティ！聞してる！？聞いてないよねえ！！？」

「そうだった。やっぱりここは、ユウイに加えてシテイルも巻き込まなくちゃ！！シテイルはユウイコンプレックスだから言いくるめられるかなあーそうだ！リディアとユースも巻き込んで、派手にやっちゃおうっ！！」

既にユウイの声は、ファティには届いていないらしい。

巻き込んでる自覚があるなら、是非とも皆を巻き込むのだけは止めて……………っ。

しかしユウイの心の叫びが聞こえる筈もなく。

ユウイはファティの計画に、無理矢理荷担させられることになってしまったのである。

一話 選抜部隊

「うーん……」

リアフエリル
千年奏樹82階。

地上286階、地下36階をもある千年奏樹リアフエリルの中でも80階から100階は、秘神子ひめみこと呼ばれるα純潔種の住まいとして存在していた。

その階層の多々ある一室で、ベッドにクッションを抱えてうずく蹲り、唸り声をあげる少女が一人。

彼女の名前はルフィナス・ラナレイス。

深い海のような濃い蒼髪を胸元まで垂らし、若葉のような新緑色のタレ目は、枕の上に置かれた機器——自身の所持する画像端末へと注がれていた。

「……………うーん、」

「……何やってんの、ルナ」

「ふえ？あ、シイラ」

シイラ——ルシイール・織・サルフレナは、綺麗なストレー
トの金髪をタオルで拭きながら灰色の双眸そうぼうをルナ——ルフィナス
に向けた。

巫女は塔の第二に大切な存在なため一人一部屋だが、秘神子の場
合二人一組の相部屋。そんな中でもシイラは、ルナにとって秘神子
になる前からの親友という間柄だ。少々人見知りの傾向があるルナ
にしてみたら、願ってもいないものだった。

「ほら、ジイール達に言われてたでしょ？遠征の任務行く場所、考
えておけて」

「ああー、確かにそんなこと聞いたかも」

いかにも興味なさげにルナの向かい側のベッドに腰掛けるシィラ。

「えー、だって遠征の任務に行くなら、せめて自分の行きたい場所に行きたいもん。全く、シィラは相変わらずだなあ……」

ふう、と溜息を零し、画像端末を指先でスクロール。めぼしい場所はかなり埋まってしまっている。

生きたい場所、行きたい場所か……

部隊を形成するにあたって、必ず一人は秘神子が部隊の中に加わる。

そんな中でもルナの部隊は、三人の護士と二人の秘神子——ル

ナとシィラを入れた五人で形成された珍しい部隊だった。

そして最低一年に一度は遠征に行くことが、決まりとしてあるのだ。

理由は簡単。巫女になる為に最低場所は把握しておけという修行の一環だ。

さっきから端末を上へ下へとスクロールはしているものの、この時期になると多くの部隊が遠征に行く為か、あらかたの場所が人数制限一杯で募集終了。

空いている所といえば、何が出るか分からない離島が多い。

離島となると、地竜やその場所に住み着く生物にお目に掛かることになる。しかも食材など売っている場所があるわけがないため、自分達で調達するか行く前に一部隊に一つ貰える乾物が殆どだ。

その代わりに、都市への遠征期間が約二週間弱にもかかわらず、離島は一週間あるかないかほどの期間の滞在らしい。

しかし、進んでそんな苦しいことをするほど、ルナは人間が出来てはいない。

うーん……これじゃあまた今度の遠征募集かなあ……

はあ、再度溜息を零し画像を下へスクロールした——時だった。

「……………あれ？」

先程まで画像端末に載っていなかった遠征任務が書かれている。

しかも募集期限は、今日の朝から明日の午前10時にかけてと非常に短い。

急ぎの遠征かなあ？珍しい。

そう思い、画像に触れて内容を確認すると――

「――えっ！？巫女様と遠征っ！？」

「は？何が」

吊り気味の瞳を細め眉を吊り上げるシィラなど見向きもせず、ルナはただただ端末を見つめていた。

「…………決めた、シィラ」

「は、？」

「わたし、この遠征任務受けたい！！」

バツと、ルナが嬉しそうにシイラに見せる画像端末には、『巫女第二、第四透位、及び対翼士第二、第四位との遠征任務同行』と綴られていた――



「――くしゅんっ！」

千年奏樹^{リアフエリル}280階。

281階から285階は一階ずつが皇如専用のプライベートルームになっており、その下の273階から280階までが、皇如同様一階ずつが巫女専用のプライベートルームにしつらえられている。

プライベートルームと言っても階の半分は巫女個人の修行や魔法

使用のために造られた専用の部屋が幾つも広がり、もう半分の私室は巫女と巫女を護る精鋭〈対翼士^{ついでし}〉が使用する部屋となっている。

部屋の椅子に腰掛けたまま、ユウイが軽く鼻を吸る。

「どうした？ 風邪でも引いたか？」

落ち着いたテノールの声が聞こえたかと思うと、ユウイの目の前に紅茶の淹れたティーカップが置かれた。

「大丈夫。ふふふっ。相変わらず器用だねえ、シテイルは」

ゆらゆらと湯気が立ち上ぼるティーカップを持ち、ユウイが少し長めの夜のような澄んだ色をした髪に切れ長な紫苑色の瞳をした少年——シテイルにへと笑いかける。

楽しそうに微笑むユウイを見つめ、シテイルはユウイに優しげに笑いかけた。

「ちょっとー？この部屋、一応僕の私室なんだけど」

いつの間に現れたのか。

この上なく不機嫌そうに二人を見つめるファティ。

「……………だったら私室に戻らせてよ」

「嫌」

尤も^{もっと}であった意見をたった一文字で一蹴されるユウイ。

はあ、と今日何度目になるか分からない溜息を零し、再度ティーカップに口を付けた。

「それで、リディアとユースは？」

話を本筋に戻すと、ファティがえっへんと仁王立ちをして、言い放つ。

「部屋にいなかった」

「いや。威張る場所じゃないだろ……」

シテイル、ありがとう……

ユウイの言いたいことを全て代弁してくれたシテイルに感謝しつつ、「じゃあどうするの？」とファティに問い掛ける。

「とゆうよりね、リディア達図書館にいるんだよねー」

「いや、場所分かってるなら呼びに行けば良いでしょ……」

場所をきっちり特定しているにも拘らず、呼びに行こうとしない
ファティ。立案者なんだから……と呆れつつ、ユウイはファティに
呼びに行かない理由を聞いてみた。

「なんで呼びに行かないの？」

可愛らしくも美しい容貌をみせ、ユウイが軽く首を傾げる。すると
これまた悪戯っぽく口角を上げ、ファティが衝撃的なことを言っ
てみせた。

「だってリディア、ユースといい感じなんだもん」



「うーんしよ、こーらしよ………」

リ
ア
リ
フ
ア
ル
千
年
奏
樹
2
1
2
階、
聖
大
呈
図
書
館。
せ
い
だ
い
て
い

2
1
0
階
か
ら
2
2
1
階
に
%

?

「相変わらず勉強熱心だな」

まだ拾い終えていない本を拾い、ユースがテーブルへと運ぶ。
それらの本は題名は違えど、全て似たジャンルの本だった。

「ふえ？別に勉強熱心、てわけじゃあないよ。それを言うなら、
隣珠りんしゅのほうが、勉強熱心だし」

「……あの場合は少し違うだろう。まあお前がそう言うのであれば、俺は別に構わないが」

とゆうよりまたこけるなよ——パタパタと走り寄って来るリディアを見つめ、ユースが言おうとした瞬間。

「ひゃあっ—!!」

「……………またか……………」

案の定、何もない場所で蹴躓く。けつまずはあ、今日何度目になるのか分からない溜息を吐き、ユースがりディアを受け止めた。

「わあああつ……………!! ユースすっごくいつ!!」

ぱあああつと表情を崩すリディアに対し、ユースはあくまで冷淡で淡泊。

しかしその表情は何処か、呆れを示しているながらも、優しくそうに見つめる眼差しがあった。

——そうだ、これで良い。自分とリディアとの関係は、昔から
こうなのだから。

優しく穏やか笑顔を見せるひだまりを思わせる雰囲気を持つリディア。

それと相對するような、無表情で淡泊な性格をしている自分。

リディアが何かしたときはユースが支え、ユースが何かあった時にはリディアが温かい雰囲気で癒す。そう。昔から何も変わらない。

それが、この二人の相応^{スタイル}有志。

「にしても〈召喚〉か。お前の”それ”に、何か関係するのか？」

「うーん、まだ分からないけど、知識は多い方が良く。兎に角、この階層の本を全て見るつもりで、色々見て回っている、のかな」

それより。こてんつと首を傾げ、リディアが間延びした声で問い掛ける。

「さっき、表示見てなかったみたいだけど、どうしてわたしのいる場所が分かったの？」

「何年対翼士やってると思ってるんだ。お前の魔力波長くらい分かる。にしても、凄い量だな」

テーブルに座ってリディアが目を通してある本は、一冊一冊が分厚く、それでいてぎっしりと文字が埋め込まれた魔法書ばかりだ。これを全て読み終わるには、一般的には早くて一日。もしかしたら三日掛かるかもしれない量。

しかしリディアは、その魔法書を約2秒と掛からずページを捲る。それはα純潔種の長所、〈瞬間的記憶能力〉と名付けられた力の為であった。

人は一般的に、読んだモノを見て、読み込み、理解する、という三観点の行程が必要になる。

しかしα純潔種の場合、見て、そのままの情景を記憶する、という、一つの行程しか存在しない為、この驚異の記憶力が実現されているのだ。

ページを捲ることに現れる幾何学な模様の円陣。それと共に描か

れているのは、フェリース言語や魔方陣専用の古代メルシヤ言語。

「…………ふあ、そういえば」

「どうした、リディア」

じっと本を見続けていたリディアがふと顔を上げ、ユースを見つめる。

「ユース、暇じゃない？ やっぱり訓練してたほうが……」

自身の都合に彼を付き合わせてしまっている事に対して、酷く申し訳なさそうに項垂れるリディア。
その姿に苦笑を浮かべ、ユースが近くにあった本を適当に抜き出した。

「俺も読みたい本があったからな、調度良いだろう？」

微かに微笑みを見せるユースの表情を見て、リディアがぱああ
っと表情を綻ばせた。

「ありがとつ、ユース」

とびっきりの笑顔で謝礼の言葉を述べ、再度読書に没頭するリ
ディア。

リディアが笑ってくれるなら、こう言う日も悪くはない。

そう思い、ユースは読みもしない本のページを開いたのだった。



「ふふふっ。やあーっぱりいい感じ——」

「よし、シテイル。リディアとユース呼びに行こう、い・ま・す・
ぐ」

ガタンッ。ニヤニヤしながら遠視魔法を利用している犯罪ライン
スレスレ——とゆうか既に犯罪行為に等しいことをしているファ
ティを置き去りにして、つかつかと急ぎ足で扉に向かうユウイ。

それに対し、シテイルは複雑そうな顔をし、ファティを冷ややかな
瞳で見つめていた。そりやそうだ。盗視とうしなんか趣味が悪い。もし
かしたら自分もやられている可能性があるだけに、ファティの行動
は頂けなかった。プライベートもなにもあったものじゃない。

「えーだって巫女と対翼士ついでくしが仲睦まじいのは良いことじゃない？」

巫女の専属護衛パートナーであり巫女の心を一番良く理解しているとされて
いる精鋭——対翼士。

その名の由来は巫女を片羽根と例え、対翼士はその巫女のもう片方を担う。そう言った意味で付けられた名前だ。

鳥は片翼では決して飛ぶことは出来ないが、両翼あれば飛び立てる——”翼”という言葉から、自由を表してもいる。

普通の人間より優れている部分が大きいため、本質は酷く脆い。そんな彼女達の心を支え、守護し続ける。それが対翼士の役目だ。

「…………いや、明らかに言い方がいやらしい感じだった。絶対巫女と対翼士の関係のことで言ってなかった」

「ファティが言うことは大方が面倒臭い方向に走ってるものだ相場が決まってるからな」

しらーとした目で二人が言うと、にっこりと笑ってファティが言ってみせた。

「あ、やっぱりバレちゃった？」

否定すらしなくなっちゃったよ……

巫女の第一透位^{しゅうい}にして、魔法の腕も一級品なファティ。使える者が酷く少ないとされている無色系の魔法をいとも簡単に編み上げてしまう箇所や、多種多様の魔法を一度に完成させてしまう点からも秘神子^{ひめみこ}達から敬われ、尊敬されている筈なのだが、一度口を開けばこれだ。この上なく悪戯好きで、こういったことを考えるのが楽しい。

私も、魔法を使う点では尊敬してるんだけどな……

ファティの対翼士はかなり大変だろう。今まで私は一度も見たとはいないけど、苦労してるだろうなあ……

ファティの専属護衛^{パートナー}のことには、多くの謎があるらしい。

一つはその姿だ。ユウイだけでなく、誰一人としてファティの対翼士の姿を見た者は巫女の中にはいない。ファティに訊いてみれば、ちゃんと言われるのだが、いまいち良く分からない。

きやははっ。いかにも楽しそうに笑い声を上げるファティを見て、ユウイは切実に思った。

やっぱり、ファティの対翼士は大変そう。

よくこんな面倒そうな人の対翼士になろうと思った物好きさんはどんなものやらと思い、ユウイは心の中で掌を合わせたのであった。



ゾワッ。背筋に悪寒が走る。

思わず肩を揺らすと、マント型をした顔まで隠れる長さをした口
ブが風に靡く。

思わず辺りを見回せど、見えてくるのは萌えいでる緑の植物。

眉を顰^{ひそ}めながらもその人は、緑を踏み締め颯爽とその場を離れた。



「早く早くう！四人ともっ」

「あの子いつもの五割増しくらい騒がしくてうざったいんだけど」

「シィラ。ノンブレスでそんなこと言うな。怖いわ」

リアフエリル
千年奏樹10階、任務交信施設。

任務に行くための承諾を取ったり終了時に報告に行ったりするために長官と内線で連絡を取れる、盗聴妨害の魔法が浸透した施設であり、また特殊で密事な会話をするために造られた専門施設。

テンションが無駄に高いルナにそんな彼女を冷ややかな瞳で睨むシィラ。そんな彼女を宥める^{なだ}苦労性の部隊長フェジールことジール、眼鏡を掛けた明るい灰色の髪をしたノヴァ。長身に赤髪をしたお兄さんの位置を担うハーウェイルといった、なんとも個性的な人材が集まったこの上なく珍妙な部隊である。

「んで、どんな任務に行きたい——」

『巫女様と対翼士に同行出来る任務！！』

ハーウェイルが呆れ顔でその様子を見つめていれば、なんとルナとジールが同時に叫ぶ。

「あれ？ジールも行きたい任務一緒？」

「ああ。……ルナもか？」

目をパチパチと瞬かせながら、二人が顔を見合わせる。どうやら被ったのはたまたまだったらしい。

「もっちらんっ！だってだってね！あの天才と謳われた洗命せんめいの巫女ユーイリシア様と朧醒ろうせいの巫女リディア様と一緒に遠征行けるんだよっ！？秘神子ひめみこにとったら、これ以上ない幸せだよ！」

「だよなーっ！おれもさ、シテイル隊長とユース隊長が出るから出たいんだわっ！とゆうよりこんな部隊率いての任務、早々ないし」

俄かに騒がしくなる二人。その二人を眺め、ノヴァが呟いた。

「でもその任務って、選抜制なんだよね。絶対に参加者は増えるよ。僕らみたいな部隊で勝てる？」

「何気に酷いなノヴァ。ま、ここまで来たら、なんとかやるしかないだろ」

苦笑をしながらハーウェイルが言う。自分自身も行ってみたいのだろう。何せこれだけ大きく短い期間での募集だ。それが巫女と対翼士との遠征任務であれば、行きたいと思うのは必然。

しかし問題は、この募集期間にどれほどの部隊が参加を表明するか、だ。

「…………ま、んなもん今言ったって分かんねえか」

ぽつりと呟き、ハーウェイルは自身の部隊を細目で見つめた。

……こいつらとなら、選抜は行けそうだな。

他の部隊と違って、本番になると本来の役割を果たせると言う、とても変わった部隊だ。

ジールが近距離担当で剣、ノヴァが遠距離担当に加え指揮取りで弓、ルナが中距離で防衛。シィラは遠距離で攻撃。自身は槍といった、近距離担当だ。

「よしっ。頑張るぞーっ！」

一人騒ぐルナにくすくすと笑いをこらえ、ハーウェイは明日の選抜試験を心待ちにするのであった。

?



リアフエリル
千年奏樹279階、第二透位専用プライベートルーム。

「……………もういやなんだけど」

広々とした、ユウイ一人が過ごすには大きすぎる部屋の中。
はあ。その部屋のソファの上で膝を抱えた状態で、ユウイは大きく溜息を吐き出した。

溜息の理由は、言わずもがなファティの悪戯の件である。つい先ほどまでファティの部屋で行われていた激しい口論。ユウイは絶対に駄目だと主張をしファティを止めようとしたが、努力虚しくファティに押し切られるかたちで終了してしまった。

帰り際、ファティは笑顔で「明日、楽しみにしててねー」と、な

んともまあきらきらした顔で見送ってきたのだ。

それが不安と悩みの種なんだってばっ……!!

ううう……。頭を抱えながらこめかみをほぐすユウイ。明日胃が痛くなりそうだ。

そんなユウイに苦笑を浮かべ、シテイルがネクタイを緩めながら向かい側の椅子に腰掛けた。

窮屈だったのかそれとも暑苦しかったのか。きっと双方ともだろう。制服の上まで脱ぎ、シャツのボタンを第二まで外すシテイル。

「こんな真夏に、暑くないの？」

「暑いに決まってる」

驚くほどの即答だった。間髪を容れない物言いに、ユウイが首を傾げる。

「じゃあ、夏服とかってないの？」

「ないな。シャツはともかく、上は指定だ。それをいうなら、巫女の法衣だってそうだろう？」

なるほど……。じゃあシティルの制服も巫女の法衣と同じで象徴みたいなものなんだ。

ふむふむと一人納得するユウイ。話題から逸れている。しかし素で気付かないのがユウイだ。それ以前に、自分が話題を変えてしまったことも気付かないであろう。

「それより本題だろ？ 良いのか、ファティに押し切られた感じで終わらせて」

「……………だって、」

むう。不服そうながらもその次の言葉が出せないユウイ。実際ユウイも、選抜試験で自分と共に赴く部隊を自分で決められたら良いと思っっていたりはしたのだ。しかしそこは巫女。なんとか我慢しよう、と言葉にはしなかったのだが……。

タイミング悪いよ、ファティ。

はあ。本日何度目になる溜息だろう。かくんつと項垂れるユウイを横目に、シテイルははてさてとこれからの末路を思案する。

数秒後。

……出た結論はこうだ。
ただじゃ絶対に終わらない。寧ろ派手にやらかして事態が悪化する。

ユウイが未だ巫女としての威厳と義務か、はたまた自分個人の好奇心と悪戯心を開放するかで悶々と脳内で葛藤を繰り広げていると、

ポンツと頭を優しく撫でられる。

「…………シテイル？」

いまいち彼の意図が掴めず、少々不安になって恐る恐る首を上げれば、そこには優しくに微笑むシテイル。

大きくて少しごつごつした手は、彼が努力して培^{つちか}ってきた結晶だろう。自分に厳しく、人にも厳しく、時に優しく。そんな彼が重ねてきた努力は、ユウイも幾度となく見てきた。

温かい手の温もりにおとなしく身を委^{ゆだ}ねながらも、シテイルをじっと見つめる。

すると、ゆったりと優しく撫でていたシテイルの顔が、ふと引き締まった。

「ユウイ。行きたいか？」

簡潔で率直な、彼らしい問い掛けだった。回りくどい言い方は絶対にしない、真っ直ぐした物言いと瞳。

そう思うと、不思議と笑みが零れた。そしてその瞳に応えるように、ユウイも真っ直ぐと彼を見据える。

「行きたい」

一言。迷いも悩みも全て断ち切った、たったの一言。

他人にはなんの変哲もないその一言が、ユウイとシテイルの絆の証。言わば心の有志。

「——よし。行くか」

それを合図に、二人は互いの顔を見合わせ微笑んだ。

「ねえねえねえねえっ！」二人”とも！”

ガチャッ！！少々乱暴に寢室の扉を開け放つユウイ。

真っ暗な部屋の中にカントリー風の木の机や本棚、ダンスが並び、天蓋が付いた淡い空色のベッドが中央に置かれた、部屋の大きさの割にはかなり少ない日用品の中に、白銀の毛並みに碧眼をした体長三メートルはありそうな白狼に、濡れ羽根色の毛並みに鋭い翡翠の瞳が印象的な、体長三メートルはある黒狼。

ユウイはその二匹に怯えるふうもなく、寧ろ嬉しそうに抱き着い

た。

あー……もふもふうっ……

ぬくぬくした感覚を存分に味わっていると、ゆったりした動作で抱き着いていない方の黒狼が立ち上がる。

その動作一つ取っても悠々と荘厳な雰囲気があり、ユウイはふわりと花が綻ぶかのような微笑むをみせた。

『楽しそうですね、ユウイ』

『何かいいことでもあったか』

突如として響く、エコー掛かった声。

一つは女性らしいアルト寄りの声。しかし優しい声質とは裏腹に、何処か荘厳で含みを持った声は、聞いているものを落ち着かせる独特の雰囲気を持っていた。

二つ目の声は、パイプオルガンのように重厚でしたたかな男性の
声。聞いている者を従わせるような声は、正しく王を前にしている
威厳があつた。

そしてその声の主は——二匹の獣。

一般的に《神獣》^{しんじゅう}と呼ばれる彼らは、”神力”を持ち得る獣と称
されている。

神獣は精霊や土地神同様、魔力、霊力などを宿す獣だが、他の獣
とは違い、擬人化^{ぎじんか}出来る。

それでいて”祓い”の力を宿す神力を兼ね備え、魔力、霊力も下
級とは比べ物にならないくらい大きいのが現状だ。

それでいてユウイの神獣は、神の慈しむ心がカタチとなったタマ
ゴ型のオパールのような輝きを放つモノに、契約者の血と魔力をも
って形成された、言わば至高の獣。一般的にそれは、上級獣^{じょうきゅうじゅう}と言わ
れる神獣だ。

他にも中級獣や下級獣などがあり、中級獣の神獣は生命の力を源として形成された獣。そのため〈獣化〉〈擬人化〉と二通りしか変化が出来なく、しかも擬人化で使用するエネルギーは自身らの魔力の器から形成する者であるため、長時間やってしまうと体力や身体に負担がかかってしまうのである。

そして下級獣は言わば普通の獣との混血。そのため力が上級獣や中級獣より数十倍弱く、擬人化すら出来ない。強いて言うなら、喋れたり、意思の疎通などが出来ることであろう。

それでいて上級獣は、契約者の想いの強さと血契^{けっけつ}、契約者の魔力量に比例して力を生み出す。つまり神獣と契約者は、一心同体ということだ。

名を白狼をシンシア。フルネーム《シェンスティール》
黒狼をレイス。フルネーム《レイファース》

「そうなのっ！ほら、明後日に選抜試験があるでしょ？その試験に、シテイルと一緒にこっそり出る事になったのっ。…………ファティの悪戯が始まりだけど」

『それはなんともまあ、』

『予想通りの相手だな』

冷静に場の状況を判断した二匹。双方ともいつも通りだというようにつつとした態度で座っていた。

『うーん……ファティの魔法の技量は凄いんだけどね……』

ファティが秀でている魔力色は翠^{みどり}。故に植物などの召喚や自然系^{ふうらい}の風雷系に長けており、その他も遠視、念話の領域系、結界や空間移動の空間系などといった、翠の魔力色を代表とする精密で複雑な魔法構築を必要とする魔法を得意とする。

そしてファティには、これといって苦手な魔法がなく、魔力波長はどれも均等に並んでいるらしい。

それ故にユウイ自身も、ファティを教師として魔法を幾つも習った。魔法の術色構築^{じゅっしき}のやり方、領域系の魔法範囲の広げかた、持続精度……これらを代表に、ユウイはファティから指南を受けていたのだ。

「先輩巫女としては尊敬出来るし頼りにしてるんだけど、一度口を開いたらあれだからなあー……」

明日の朝辺りに届くであろう念話に頭を悩ませる。一方的に作戦内容を言っ**て**ぶち切られるのが目に浮かぶようだ。

小さく息を吐くユウイに、相変わらず表情がころころ変わると感心する二匹。

『そんなことより、早く寝た方が良いのでは？体調管理も巫女の責務ですよ』

「……………確かにそうだね」

シンシアに諭され、素直にベッド滑り込むユウイ。
体を横たえると、ふんわりと甘過ぎない花の香りが鼻孔をくすぐり、ユウイの眠気を誘う。知らぬ間に疲れが溜まっていたらしい。

「おやすみなさい……」

微睡^{まどろ}みの中小さく呟くと、ユウイの意識は闇の中へと沈んでいった――

『おやすみなさい、ユウイ』

『今はゆっくり休め……』

そしてそこには、少女に付き従う二匹の獣が、少女を守るように両脇に腰を下ろした。



キィィー……イィー……ンツ……

まるでガラスのように澄み、鏡のように世界を映す、その場所に。

緋、黄、蒼、白、翠……酷く美しい花々が、ゆらゆらと揺られながら氷の中を漂^{ただよ}っていた。

氷の花園——

美しい花園を、そのままの美しい姿ままに時を止める、氷塊に沈んだ世界だった。

カツッ、カツッ。

そんな世界に響くのは、一人の足音。

硬質な氷の床を華奢なミュールの靴で叩き外套ロープを靡靡かせる”その人”は、目深に被った外套ロープのフードを指先で軽く持ち上げ、ふと進ませていた歩を止めた。

カツツ。響き渡る靴音。

すると”その人”はゆったりと目を細め、目の前に聳そびえる氷塊を睨みつけた。

「こんなちんけな場所におりましたか」

俄にわかに怒気を含んだ声。

”その人”が睨みつける先には——氷塊に沈んみながらも〈障しよ気を放つ化け物〉がいた。

「この美しく清らかな場所に、一体誰がこのようなモノを封じて……」

憎々しげに吐き捨て、”その人”は回りを再度見回した。

見回す先にあるのは、氷に埋まった花々。

あまりにも似合わない禍つモノとの対比に、酷くしかめっ面になる”その人”。

しかしふるふると振り切るように頭を振ると、”その人”は外套ローフから細長くもしたたかな手を出した。

その白魚のような掌には、煌々と光を放つ緋と蒼の光がキラキラと粒子を零しながら溢れ出る。

「……理由はどうであれ、我らの《姫》の幸せへの脅威になるのであれば——」

高々と腕を掲げる”その人”。その声音は先と違って、なんの感情も感じない機械的なものだった。

さようなら——

声と共に、腕を振り下ろした。

カシャ…ヤ…ーンツ…………

悲しげな音色をたて、氷塊ごと真っ二つに割れる化け物。

?

キラキラと反射する氷の粒子と断末魔を上げて煙のように消え失
せる魔族を暫しの間見つめ、”その人”はふわりと外套を翻した。
アンデッド しほろ ローフ ひるがえ

そのまま一歩、歩を進めようとした瞬間。

ぞわりっ――

背筋をなぶるような、怖気にも似た悪寒が全身を駆け巡った。
本能的に一瞬で身を翻す”その人”。カツッ。器用に身体をしな
らせ跳躍。そのままの勢いを殺さぬまま、バク転の要領で360度
回転し、氷塊の上に優雅に着地する。

刹那。

ガッシャーッツーン!!!!

”その人”が先まで居た場所が、氷の欠片を散らして陥没^{かんぼつ}した。

ユラリ——醜い外見を揺らし、禍^{まが}つモノ——魔^{アンデッド}族が赤黒い霧を漂^{まが}わせる。

そしてその化け物が睨む先は——自分。

ツーツと、冷気を帯びた頬から雫が伝った。俄かに溢^{あふ}る邪気を
感じ、”その人”が詠うように呪文を紡ぐ。

『ファルファ・ツァ・シェン・セラ』

”その人”を纏うように展開する黄と緋と蒼の翠の結界。

黄で強化、緋と蒼で洗礼、翠で空間に展開するするといった、常人には離れ業といった魔法をいとも簡単に編み上げる”その人”。

ガルルウウ…………ツウツ…………

まるで獣のような姿の魔族が身アムデットを縮め、ジリジリと腰を低めながら威嚇の唸り声を上げる。どうやら、自身の天敵なる洗礼の魔法に気付いたらしい。

「…………その汚れた闇、根刮ねこそぎ洗い流して差し上げましょう」

そう呟き、外套ローブから銀色の柄のないナイフを取り出す。そのナイフは、緋と蒼の粒子をまといていた。

此処は、この場所は、我らの《姫》が愛した場所だ。麗しく優しい《姫》が、笑顔でいてくれた場所だ。

しかしこいつは、こいつらは、その場所を壊^{けが}した――

「ただじゃあ、返しませんよ」

低く低く吐き捨て、先ほど魔物^{アンデッド}が壊した場所を見た。

そこは、無惨にも抉られた氷の床に、魔族^{アンデッド}の汚染が始まった証を示す赤黒い腐蝕の痕。

最悪だ。この聖域を汚された。

知らず知らずのうちに殺意が芽生え、ジワジワと殺気が充満する。

ビクッ。それに恐れ慄^{おの}いたのか、魔族^{アンデッド}が体を震わせた。

このモノに、自分は勝てない。

本能的に身を竦ませる。殺される事が分かっていて、明らかに実
力が上なモノに戦いを挑むほど馬鹿ではない。魔族アンデッドの中でも下級種
族のモノでも、瞬時にそれを理解したらしい。

「わたしの目の前から、早々に消えろ」

”その人”がナイフを投げようとした瞬間。

ワオオ……オオオ……ンッ

魔族アンデッドの獣が、遠吠えと共に出口へと駆け出した。

「ツツツ!! 待ちなさいっ!!」

金切り声で叫び、氷塊から跳躍。降り立つ時間さえもどかしく、

空中時間を空間移動魔法を使って洞窟の外へとふわりと着地。

しかしそこには、既に魔族アンデッドの姿は見えなかった。

波長を追ってみれば、随分遠くまで走り去ったらしい。洞窟を抜けて森林の中へと入っていた。

——逃げ足だけは、無駄に速いですね。

自分の失態に嘆息。しかしそれも束の間、”その人”は小さく呪文を唱えた。

「——聞こえますか、《紫夜晶》ナデシコ」

透き通るように響く眩き。

《——はいっはーいっ！聞こえてますよー！》
《真緋羽》ダリアさん？《》

数秒後、無駄に騒々しい念話が辺りに響き渡った。念話をした自分以外にまで反響して響いてる辺り、相当テンションが高いらしい。

「……………相変わらず、テンションが高いことで」

それとは対照的に、冷ややかな声音で返事代わりの嫌味を言い放つ。

《あら怖い。そちらが華位かいを使って呼んできたから、同じように華位で名前を呼んだだけじゃない》

からかいを存分に含んだ口調で語り出す念話相手。
いつものことだ——そう適当に受け流し、本題へと話を進める。

「五月蠅いのは《翠颯茨》スズラン 一人で間に合ってますから、貴女は兎に角黙って下さい。話が進展出来ません」

《はいはい、分かりましたよー……。——それで？》

刹那、先ほどの緩い声とは一変、真剣で現実味を帯びた声質に変わる。

相変わらず、仕事と遊戯オンオフの差が激しいことだ——つと、本題に入らなくては。

別方向に走っていた思考回路を一瞬で断ち切り、簡潔に内容を述べる。

「自然区内にある洞窟《氷華織フリースエンの刻庭とくにわ》から、魔族アンデッドの姿を確認。一体撃破しましたが、もう一体に気付かず、そのまま逃亡を許してしまいました、申し訳ありません」

《わぁおっ。貴女が仕留め損なうなんて、稀に見る悲劇ね。明日天候が荒れそうだわぁ》

「……………迂闊でした」

珍しく反論しない素直な返事に、《紫夜晶》^{ナデシコ}が念話先で表情を止めた。

「わたしとしたことが、懐かしい場所に絆^{ほど}されて確認を怠ったのです。魔族があの場合に封じられているのを見て、冷静に判断出来なかったわたしの欠陥^{ミス}です」

申し訳ありません——再度、深々と誰もいない場所に頭を下げる《真緋羽》^{ダリア}。

《真緋羽》^{ダリア}のその様子を遠視で見つめていた《紫夜晶》^{ナデシコ}が、念話先で息を吐き出した。

《——それで?》

「……………え?」

怒られると思った矢先返ってきた返事は、簡易な疑問だった。

《貴女はそれで、挽回を何処でするのかと聞いているの》

うだうだ謝罪言ってるくらいなら、とっとと仕事したらどう？——
彼女の口調は、優にそう告げていた。

「——そうですね。……ありがとうございます」

幾らか口調が柔らかくなったのを聴き、
《紫夜晶》ナデシコがふう、とば
れない程度に息を吐く。

……全く、ほんとに思い詰めると周りが見えなくなっちゃうのね。

困ったモノだ、と小さく微笑む
《紫夜晶》ナデシコ

「それでは《紫夜晶》^{ナデシコ}。魔族の始末は宜しくお願い致します」

《そうだろうと思いました。今捕捉^{さが}しているところよ》

「理解と仕事の速さだけはわたし達の中でも群を抜いていますね。それを仕事に使ってくれば、文句はないのですが」

《はいっはーいつ、嫌味は良いですから、貴女も仕事してくださいな》

じゃあね——嫌味などものともせず、念話先の《紫夜晶》^{ナデシコ}からの声が消えた。

「——ふう」

念話終了から数秒後、詰めていた息を吐き出す《真緋羽》^{ダリア}。そしてふわりと外套^{ローブ}を靡かせながら再度洞窟へと足を進めた。

まず第一に、この場所の浄化と修復。その後――

「……………この場所に汚れた闇を封印した人を、徹底的に叩き（探し）出すと致しましょうか」

そういう”その人”の瞳は、爛々と輝く獣じみた緋眼をしていた。



《ユ・ウ・イ！！おっはよおー！！》

ガタンッ！すやすやと穏やかに眠りこけていた少女は、大音量で響き渡る念話に驚き、脇に置いてあった目覚まし時計を床に落とすてしまった。

未だに寝ぼけたままの眼を必死に持ち上げ、床に落とした時計を拾う。

現時刻、3時30分。

………いやいやいやいや。

それを見た瞬間、驚きの余りもう一度時計を落としてしまうところだった。

え？3時30分？午後じゃなくて、朝の？

思わず時計を凝視してしまったが、細い秒針はしっかり動いてい

る。

……………頭痛くなってきた……

思わず顔を枕に押し付けていると、けたけたと表すのが相応しいような笑い声が聞こえる。

「……………ファァーティさん？」

ユウイがいつも起きているのは、修行時は4時30分くらい。約二日間ほどは使用する華視訓練^{かし}という長時間での修行を除き、いつ任務で呼び出されるか分からない巫女という仕事において、睡眠は取れる時に取っておけと言われるくらい大切なものだと言われている。

《何かな、ユウイ？》

「非常識にも程があると思うのは、私だけなのかな…………？」

眠気が取れない体の中で叱咤し、瞼を閉じて頭のもやもやした感じを鎮める。普段眠気が覚めない時に、ユウイが使う精神安定法の一つである。

「——ふう。それで、作戦はどんなの？」

ぐぐうーつと伸びをし、天蓋付きのベッドからスルリと降りる。そしてカーテンを開ければ、まだ朝早いと言うのにいる位置が高いためか、眩しい光が目を焼いた。

そして光に晒された美しく優雅な銀髪がキラキラと反射し、極彩色を煌めかせながら髪を飾る。

《相変わらずキレイな髪と瞳^めしてるよねえ。正しく、神様の宝石
って感じ》

「すみませんが、本題からずらしているのは、私へのこじつけです

か。それともただからかってる？」

質問から180度離れた返答とさえ言えない返答に、ユウイがもう嫌だというように無視をし、ちよいちよいと手招きをして起きたばかりのシンシアとレイス呼び寄せる。

えーとかなんとかを念話で言っているファティは放置。シンシアとレイスに人模^{ヒトカタ}になるように言うと、何の躊躇もなく美しい銀髪に緑眼の女性と、艶やかな漆黒の髪に碧眼をしたシンシアとレイスが現れた。その二人？に、こしょこしょと耳打ちをして頼み事。

シンシアとレイスが頷き、颯爽とその場を後にしたことを確認してから、ユウイはクローゼットへと向かった。クローゼットから掛けてあった自分専用の法衣を取り出し、寝間着を脱いでサツと袖を通す。

《何処行くのー？》

「どーせ遠視で見てるんでしょ？なら聞かなくても見てれば分かるトコ」

つんつとした態度で寝室の扉に手を掛ける。

こんな早起したんだから、せめてやりたいことくらいやつちや
っていいよね。

ぐっと心の中で気合いを入れ、ユウイは意気揚々と寝室を抜け出
した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8385x/>

アルメフィラ

2011年11月14日16時23分発行